

【研究報告】

日本における「ヒューマンビートボックス」の概念形成（2）

— YouTubeの普及による状況の変化と今後の展望 —

河本 洋一

音 楽 表 現 学

Vol.19, 2021

日本音楽表現学会

日本における「ヒューマンビートボックス」の概念形成（2）

—YouTubeの普及による変化と今後の展望—

河本 洋一

【要旨】日本人ビートボクサー（ヒューマンビートボックスの演奏家）AFRA（藤岡章）がアメリカから帰国し、日本では2004年に国内初のヒューマンビートボックスの演奏家が誕生した。時を同じくして各家庭へのパーソナルコンピュータやインターネット網が普及し、YouTubeに代表される動画投稿サイトの出現や、ひとり1台がスマートフォンを持つなどのIT環境が急速に発展した。ヒューマンビートボックスはこの変化を受け手新たな動向が見られる。

本稿ではこの変化が及ぼしたヒューマンビートボックスの概念形成への影響を把握するために、AFRAに続く日本を代表するビートボクサーやボーパの奏者（指導者）4名へ聞き取り調査を実施した。その結果、ストリート文化という現実空間に存在していたヒューマンビートボックスは、YouTubeの出現によってインターネットという仮想空間の中のみで技術が習得され演奏を楽しみ、それが視聴されるという側面ももつ音楽表現に変化していることがわかった。そして、このような変化は、これまでの音楽表現の指導者観をも変えていく可能性があり、その変化に応える新時代の指導者の出現が見込まれることなどが見いだされた。

キーワード：ヒューマンビートボックス、インターネット、YouTube

1. 概念規定の再考の必要性

いての概念をさらに深めたい。

1.1 AFRAの登場以降に急速に変化したヒューマンビートボックスの概念

ヒューマンビートボックスの概念について、私は以前に「ストリート文化を由来とする音楽表現である」と述べた。この見解は、ビートボクサー AFRA の日本での活動に基づいている。しかし、最近ヒューマンビートボックス取り巻く環境は急速な変化を遂げている。それに伴い、ヒューマンビートボックスそのものに関する概念の再検討が必要であると思われる。環境の急速な変化の要因としては、AFRAの登場以降に普及したインターネット、とりわけ2005年以後のYouTubeの動画投稿サイト¹⁾が挙げられる。こうした状況変化に対応するためには、ヒューマンビートボックスの概念については、主にYouTubeとビートボクサーとの関わりから検討する必要があると考える。本稿ではビートボクサーがYouTubeと出会い、音楽表現をどのように発展させ、どのように発信してきたか、最近の動向について述べ、ヒューマンビートボックスにつ

1.2 動画投稿サイトの出現によるヒューマンビートボックスの音楽体験の変化

ヒューマンビートボックスの音楽表現に関する研究は、日本国内ではまだ始まったばかりである²⁾。それゆえ、ヒューマンビートボックスとボーカルパーカッション（ボーパ）とが混同されることが少なくない。そこで両者の差異についてこれまで発表した拙論³⁾に基づいて表に示す（表1）。

まず、二つの音楽表現は成立までの歴史的背景が異なるのである。ヒューマンビートボックスは「身体、とりわけ口腔周辺を使って多種多様な音を発する技術と単独で行う音楽表現を基本とする演奏スタイル」を指し、元々ヒップホップのようなストリート文化の一部として発祥した。それに対して“ボーパ”はいわゆるバーバーショップ・ミュージック⁴⁾のようなア・カペラの文化の中で発展してきた。ボーパには「打楽器の音を模倣する技術とアンサンブルの中でそれを担う人」から成り立っている⁵⁾。にもかかわ

* Conceptualization of Human Beatbox in Japan (2): Changes in the concept from the spread of YouTube and future prospects

by KAWAMOTO, Yoichi

専門分野：音楽表現、音楽教育、指揮

所属：札幌国際大学短期大学部

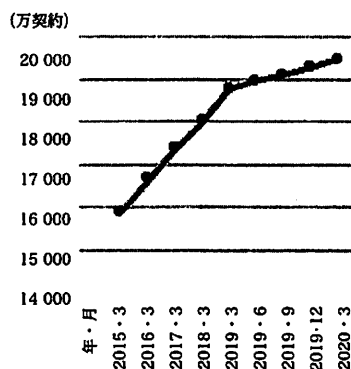
連絡先：y-kawamoto@ts.siu.ac.jp

【表1】ヒューマンビートボックスとボーカルパーカッションの対照表

名 称	歴史的背景	形態	使われる音
ヒューマンビートボックス	ヒップホップを発祥とするストリート文化。1980年前後に発祥(諸説あり)	単独演奏を基本	発祥当初はドラムなどの模倣が中心だったが、今では口などから多種多様な音を発して音楽を構築する。
ボーカルパーカッション (通称：ボイパ)	バーバーショップ・ミュージックのようなア・カペラ文化。1930年代前後に発祥(諸説あり)	アンサンブルの中の一つのパート	ア・カペラの中で打楽器の音を模倣する。通常は1人が担当するが音楽としてはアンサンブルの一部である。

らず、この二つの音楽表現には表現方法に類似する要素もあるため、しばしば混同される。類似点として例えば、初心者の指導では8ビートのような定型的なビートを刻み、使用する音が基本となる点などが挙げられる。したがってYouTubeのヒューマンビートボックスの動画サイトを初めて視聴する人は、ほとんどの場合、ヒューマンビートボックスとボイパの違いを意識していないと思われる。したがって現在では、これら二種の音楽表現を厳密に区別することなくシームレスに捉えて、“口から発する直接的模倣音⁶⁾。などを使って楽しむ音楽”という大きな括りで捉える愛好者が現れても不思議ではないだろう。

近年コンピュータの情報処理能力は飛躍的に向上し、誰でも手軽に大容量の動画を視聴できるようになった。動画視聴の普及は“Windows95”(1995)を搭載したパーソナルコンピュータが各家庭に普及し始めた頃とは比較にならないほどである。加えて、若い世代の動画資料率の急速な上昇の背景にスマートフォンの普及がある。『ニールセンデジタルコンテンツ視聴率データ』⁷⁾(2019)によれば、YouTubeを利用する18～20歳のうち87%がスマートフォンのみで動画を視聴していることも明らかとなっている。同じ音楽情報を見知らぬ者同士が共有するのはライブ会場にも共通している。YouTubeの普及はヒューマンビートボックスについても、〈いつでも〉〈どこでも〉〈何人でも〉情報共有できる環境を生み出したといえる。肌でビートの音圧を感じる必要がないならば、もはやライブ会場にいる必要もない。



【グラフ】携帯電話の加入契約数の推移 (総務省「令和2年度情報通信白書」より携帯電話のみ抽出)

さて、ビートボックス AFRA にとっては“THE ROOTS”(1987-)との出会いがヒューマンビートボックスを知るきっかけであった⁸⁾。彼はその当時、レコード¹²⁾の音を頼りに想像力を働かせて演奏技術の獲得を試みていたのである。しかし、それから四半世紀を経た今、人々がヒューマンビートボックスに出会ったり、演奏技術を習得したりする方法はYouTubeに大きくシフトしている。

2005年に登場したYouTubeに代表される動画投稿サイトの急激な普及は、移動系通信(携帯電話等のワイヤレスブロードバンド)の加入契約数に明確に現れている。

総務省の『令和2年度情報通信白書』(2020)によれば、調査が始まった2015年3月末に17,732万契約だったNTTドコモ、KDDI、ソフトバンクの大手3社の加入契約者数(合算値)は、2016年3月末には19,570万契約、2017年3月末には21,474万契約、2018年3月末(グラフ1)。

このグラフの上昇線の契約数が人口を上回る規模にまで達していることから、現在は個人レベルで気軽に動画を視聴できる環境があることが明らかである。

筆者はこのようなスマートフォンの急激な普及が、ヒューマンビートボックスの音楽体験に変化をもたらしたと考えている。表2に、これまでの「直接体験(全身で感じるストリートやライブでの生演奏)」→「発見(試行錯誤して自ら発音技法を発見)」→「創作(自ら確立した音による創作)」という音楽体験の流れが、「疑似体験(インターネット上でのお勧め動画)」へと変化していることを示した。

1990年代にはヒューマンビートボックスやボイパを見たり聞いたりするためには、解説動画などはなく、ライブに行くか数少ないレコードを入手するしかはなかった。ところが、現在では、インターネット上にヒューマンビートボックスの演奏と解説動画がアップロードされている。基本的な奏法だけでなく高度な演奏技術の習得法までを視聴することが可能になったのである。表2はそのような環境の変化とヒューマンビートボックスの関係を表している。

【表2】YouTube 普及前後のビートボクサーの変化

YouTube	初鑑賞	音作り	演奏
普及前	【直接体験】 ライブやレコード 生演奏	【発見】 自ら試行錯誤 発音技法を発見	【演奏方法】 自ら確立した音による創作
普及後	【疑似体験】 YouTube	【模倣】 解説動画の活用	【演奏】 SNS 環境構成に適応した音作り・演奏

1.3 スマホの急速な発展がヒューマンビートボックスに与えた影響

2009年に一般社団法人日本ヒューマンビートボックス協会が設立され、Japan Beatbox Championship (JBC)¹¹⁾が開催されるようになった。現在、ヒューマンビートボックスやボイパの鑑賞機会は主にYouTube動画によって提供され、その演奏技術もまたオンデマンド¹²⁾で解説され、それらが“指導者”の機能も果たしていると思われる。ヒューマンビートボックスは、インターネットやスマートフォンの普及と共に発展してきたと言えよう。一方、視聴者は多くの場合オンデマンドの解説動画を自分なりの解釈で模倣し、演奏技法を習得していると考えられる。ヒューマンビートボックスやボイパの演奏技術に正しいか正しくないかという判断を持ち込むことや、この分野に「教える」「教わる」という師弟関係のような関係性が成立するののかについては、慎重に検討する必要がある。このような根本的な問いは、今後ヒューマンビートボックスの概念の研究を進めていく上で、大変重要な観点となっていくと思われる。

そこで本稿では、ビートボクサーや共通する要素が多いボーカルパーカッショニストらに聞き取り調査を行った。AFRAから始まった日本のヒューマンビートボックスが、YouTubeの普及以降どのように発展していったのかにつ

いて考えたい。

2. 研究目的・方法と結果

2.1 インタビュー調査

筆者は、ヒューマンビートボックスの動向を明らかにすることを目的に、ビートボクサーやボイパの関係者に、Zoomを用いてインタビュー調査を実施した。なお、調査対象にボーカルパーカッショニスト（ボイパを演奏する人）を加えたのは、日本ではヒューマンビートボックスよりもボイパが先に知られるようになったという日本特有の背景に配慮している。

2.1.1 調査の方法

調査方法は、次に示すA～Cのテーマに沿って筆者が半構造化インタビューを実施した。なお、最終回のみフォーカス・グループ・インタビューを行い、筆者がファシリテーターを務めた。また、実施日時と対象者は下記のとおりである。なお、3回目は4名全員がZoom上に一堂に会した聞き取り調査である。また、調査の際にはインタビュー・オブザーバーとしてボイパ研究家の杉村一馬の協力も得た。

【表3】調査対象者とプロフィール

ステージネーム (本名)	プロフィール
AFRA (藤岡 章)	日本人初のビートボクサー (河本：2019) 参照)
“すらぶるため” (宮脇 杜)	2009年に“FUN 外伝 BEATBOX BATTLE 2009” ¹³⁾ でビートボクサー TATSUYA と対戦し、史上最年少で優勝した。YouTubeでヒューマンビートボックスを視聴したことがきっかけとなり、環境の音、語呂の良い日本語など、面白く、かつリズムを感じられるものなら何でも肉声で模倣し、ヒューマンビートボックスの演奏に取り入れるといった“面白ビートボックス” ¹⁴⁾ を目標とし、マイクと肉声のみを使ってDJをすることを模索中のビートボクサーである。現在もYouTubeを中心に活躍しているビートボクサーで後進の指導にも力を入れている。
KAZZ (栢田 和宏)	日本に“ボイパ”という言葉が普及する前から神戸を中心に活動しているボーカルパーカッショニスト、防災士。現在は防災ユニット Bloom Works のボイパとして防災意識の啓発活動中。“ボイパ道場”という名称のボイパの指導教室の主宰者として、子どもから大人まで幅広い年齢層の指導にも力を入れている
おっくん (奥村 政佳)	テレビ番組のコーナーである“ハモネブ” ¹⁵⁾ から火が付いたア・カペラブームの中心的人物の一人で、ア・カペラグループ RAG FAIR の元メンバーでボーカルパーカッショニスト、防災士、気象予報士。現在は保育士として勤務しつつ、保育にボイパを取り入れたり、防災意識啓発の講演会でボイパを休憩に挟んだりしている。

調査（質問）内容：

- A: ヒューマンビートボックスやボイパを始めたきっかけ（初めての出会い）
- B: ヒューマンビートボックスやボイパに対する考え方（技法の獲得方法や AFRA 帰国・YouTube 普及以降の振り返り）
- C: 現在感じている課題（YouTube の活用や将来像等について）

調査方法：1 回あたり所用 3 時間程度。インタビュアー 筆者

1～6 回：半構造化式インタビュー

最終回（合同）：Zoom によるフォーカス・グループ・インタビュー

ファシリテーター 筆者オブザーバー 杉村一馬（ボイパ研究者）

- 調査日時：第 1 回 2021 年 1 月 9 日（土）10：00～13：00 おっくん（1 回目）
- 第 2 回 2021 年 1 月 9 日（土）14：00～18：00 すらぶるため（1 回目）
- 第 3 回 2021 年 1 月 10 日（日）10：00～13：00 AFRA（1 回目）と KAZZ（1 回目）の合同
- 第 4 回 2021 年 1 月 14 日（木）18：00～21：00 おっくん（2 回目）
- 第 5 回 2021 年 1 月 15 日（金）18：00～21：00 すらぶるため（2 回目）
- 第 6 回 2021 年 2 月 24 日（水）10：00～13：00 AFRA（2 回目）の KAZZ（2 回目）合同
- 最終回 2021 年 3 月 25 日（木）21：00～23：30 AFRA、すらぶるため、KAZZ、おっくん（各 3 回目）

2.1.2 調査結果と考察

A: ヒューマンビートボックスを始めたきっかけ

AFRA、KAZZ、おっくんがレコードやライブ（ストリートを含む）、“すらぶるため”がインターネットの視聴

B: ヒューマンビートボックスやボイパへのアプローチ

聞き取りの結果、全員が独学で発音方法をマスターしていることが明らかになった。日本ではテレビ番組で先にボイパが知られるようになり、その後インターネット（YouTube 等）でヒューマンビートボックスが普及していった。このような背景が、ヒューマンビートボックスとボイパとの違いを曖昧にしていっていったのではないかと考えられる。

C: 現在の課題について

全員がヒューマンビートボックスやボイパはライブと YouTube に二極化していくと考えていることが明らか

になった。しかし、YouTube では自分自身が先生でもあり生徒にもなりうると考えていることがわかった。

2.2 YouTube によって変化したヒューマンビートボックスについて

調査結果から筆者は、ヒューマンビートボックスについて再考するためには、AFRA が日本で活動を始めた 2004 年以降のヒューマンビートボックスと YouTube の関係について時系列に沿って整理した。（表 4）

この表から前述した「直接体験」→「発見」→「創作」という音楽体験の流れに「チュートリアル作成（YouTube）」までを加えて、全ての活動を YouTube 上で行った初の人物は“すらぶるため”であることが分かる。そこで考察対象を“すらぶるため”に焦点化して、次項ではすらぶるためのインタビューの回答を基に考察を進める。

【表 4】ビートボックスの YouTube での活動年表

ビートボックス名	演奏初投稿	チュートリアル	大会出場歴	補足説明
HIKAKIN	2007 年	なし	2008 年	Human Beatbox Battle 2008（大阪地域のみ大会）
“すらぶるため”	2009 年	2009 年	2009 年	FUN 外伝 横浜 Beatbox Battle 優勝（最年少）**
Daichi	2009 年	2015 年	2009 年	Beatbox Battle Wildcard（オンライン世界大会）
TATSUYA	2009 年	なし	2009 年	World Beatbox Championship 出場

* この大会が全国規模で行われるようになった最初の大会である。FUN（横浜のクラブハウス）の協力により始まった。

3. “すらぶるため”のヒューマンビートボックス

3.1 YouTube で活動を終始するビートボクサーの出現

“すらぶるため”がヒューマンビートボックスと出会ったのは、14歳（2006）の時のYouTubeの“お勧め動画”¹⁶⁾で偶然目にしたKenny Muhammad¹⁷⁾の演奏動画だった。Kenny Muhammadは、Kスネア（吸気によるスネアドラムの模倣音）の演奏技術を最初に一般化したと言われるビートボクサーで、ニューヨークでAFRAと舞台を共にしたこともある。この“お勧め動画”と出会って“すらぶるため”はYouTubeにアップロードされているビートボクサーの演奏を真似る事を始めた。AFRAが“THE ROOTS”の演奏を試行錯誤して真似ることに始まり、渡米後ニューヨークの路地裏で本物のストリート文化に触れながら演奏技術を習得していったのに対し、“すらぶるため”はYouTubeで出会い、技術の習得、演奏技術のチュートリアルの作成、演奏などの全てをYouTube上で行っている点が、ヒューマンビートボックスの新たな展開と見做すことができるだろう。

3.2 “すらぶるため”がつくるヒューマンビートボックスの音楽性

本稿の聞き取り調査で“すらぶるため”は「ビートボックスは言葉に置き換える必要が無いので、淀みなくいくらでも続けていられる」と語っている¹⁸⁾。また、「会話をする中で、思わず口にする「おー」とか「うわー」「えーつ」「はーん」といった反射的に発してしまう感嘆詞、それがヒューマンビートボックスを演奏しているときに近い感覚である」とも述べている¹⁹⁾。例えば、「なるほどね」と言わずに、「はーん」と言う応答のような場合がこれに該当する。つまり、この例えは頭の中で浮かんだことばを具体的な音楽へと変換していくのではない。耳から入ってくる音に対して反射的に口から音を発する状態に近いことを意味している。確かに“すらぶるため”のYouTubeの動画には、息継ぎが分からないくらい流暢に長時間にわたってヒューマンビートボックスの演奏を続けている動画が多い²⁰⁾。“すらぶるため”は、音楽の表現のルーツとしてアメリカの作曲家Steve Reich（1936-）の“*It's gonna rain*”（1965）や“*Come out*”（1966）に代表されるミニマル・ミュージックを挙げている²¹⁾。ミニマル・ミュージックは録音テープに記録された言葉の一部分を切り取り、それを何重にも繰り返し録音（多重録音）し、その重ね方のタイミングを少しずつずらしていく漸次変化という実験音楽として登場した²²⁾。“すらぶるため”は、「〈習う〉よりは応ずる」という方法が私のワークショップの方法です」

と語っている²³⁾。実際“すらぶるため”の音楽は、演奏している自分の音にさらに自分の音をコピーし重ね合わせて環流させていくというReichの作品と共通している。その特徴を一言で表すなら、“すらぶるため”の音楽には一種の“中毒性”があると感じる。これはSteve Reich自身が自分の作品に対して語った「今その音楽の中に溶け込んでいる感じ、そこにある音・音楽と共にいる感じ」²⁴⁾と類似する音楽性であると思われる。その特徴を別のことばで表すなら、“すらぶるため”の音楽はある種の「眩暈」を引き起こさせる。

3.3 YouTubeにおけるステレオタイプに対する

“すらぶるため”の考え

“すらぶるため”の代表的なYouTube作品『嫌だ千欲しい』²⁵⁾（2012, 2015, 2020）には、再生回数が急激に伸びた時期があった。そのような状況に関して、“すらぶるため”は聞き取り調査の中で「YouTubeのお勧め動画で『嫌だ千欲しい』を知った人がたくさん観に来たことがあったが、一見さんはお断りしたい」と語っている²⁶⁾。「一見さんお断り」とは、興味本位で自分の動画を視聴し、否定的なコメントを残していく視聴者に対して、“すらぶるため”が好意的な感覚をもっていないことを意味している。再生回数が増えれば、新規ファンの拡大と捉えてしまいがちだ。しかし、“すらぶるため”は「コメント欄に突然否定的なコメントが残されていくことが増えれば、それまでにファンだった方々への悪影響も否めない」と語っている²⁷⁾。再生回数の増加は決して人気の増加を意味するとは限らない。

“すらぶるため”は、YouTubeの再生回数の多寡やお勧め動画といった他者に依拠する情報ではなく、自分から好みを求めていくような人（聞き取り調査では“能動的な人”と語っている）が増えてほしいという考えをもっている。

このような考えは、JBCに出場した時の彼の服装に象徴されていると言えるだろう。この大会で“すらぶるため”は視聴者の予想を裏切るかのようにネクタイを締めたサラリーマン風の姿で登場した。これは「ヒューマンビートボックスとはこういうもの」ビートボクサーとはこういうスタイル」という当時の日本のヒューマンビートボックス愛好者らの間のステレオタイプな見方や考え方に対して否定的であることを表している。“すらぶるため”は日本のストリート文化は、「僕のような人を受け容れにくいような土壌を作ってしまった感じがする」と述べている²⁸⁾。

「今の時代の本当のストリートは、あらゆる人を受け容

れられるインターネットにある」と、「すらぶるため」は語っている²⁹⁾。また、「ビートボックスは歌と同じく誰もが出来ることであり、人間であればみんなが参加できるはずなのに、ストリート文化発祥だからといって、その狭い世界にヒューマンビートボックスを押し込める人がいる」とも語っている³⁰⁾。このような状況は、誰もが楽しむことが出来るはずのヒューマンビートボックスの可能性を奪ってしまうことになるのではないだろうかと筆者は考える。「すらぶるため」によれば、ライブ演奏ではなくYouTubeで聴くことだけを前提に作られているビートボックスもあるという。Youtubeによれば人間離れた特殊な音の多用によって視聴者を惹きつける「インターネット映え」する作品ができあがる可能性がある。「すらぶるため」は、ヒューマンビートボックスでは、ライブとインターネットのそれぞれの場面に適した音楽表現が許容されると考えているのだろう。

筆者は、ベルリンで3年おきに開催される BEATBOX BATTLE を観戦 (2015年5月29～31日)した。ライブでのヒューマンビートボックスは、リズム (ビート) と共に音圧が重要な要素となることを体感した。一方、HIKAKIN や Daichi は、活動当初から YouTube 視聴を前提に音楽作りをしており、音圧よりも奇抜な音や細かなビートを多用するという特徴がある。AFRA も「HIKAKIN さんや Daichi 君が登場してから YouTube 映えすることを意識したビートボクサーが増えてきた」と述べている³¹⁾。

一般社団法人日本レコード協会の調査 (2019) によれば、音楽を聴くメディアは YouTube が半数以上 (54.9%) である³²⁾。この調査結果を踏まえれば、YouTube で聴くことを前提とした音楽作りは、現代には必要不可欠なのだろう。音を聴くツールが何であろうと、「インターネット映え = YouTube 映え」する音楽作りは、表現を広く人々に知ってもらうために広がるだろう。この傾向は発信メディアの多様化や収益構造の確実性と無関係ではない。「インターネット映え = YouTube 映え」する音楽作りは、ビートボックスに限らず他のジャンルの音楽でも、避けては通れない時代ではなかろうか。

3.5 ヒューマンビートボックスへの誤った評価に関する懸念

ヒューマンビートボックスは時として「人間離れた音を出す」ことのみに関心が集まる傾向にあるように思われ

る。しかし、そのような音に特化してしまうと、それは特殊な身体的能力をもった人たちだけの音楽表現という捉えられ方になってしまう。筆者はこの危険性について「すらぶるため」の3回に渡る聞き取り調査から感じた。超絶技巧を求める傾向にはマスコミ (特にテレビ番組) の影響が大きい。例としてここで対照的な2番組を挙げたい。

第1例: NHKの番組「すイエんサー」では、「超かっこいいヒューマンビートボックスやってみない?」という題名で、ヒューマンビートボックスが取り上げられた。基本的な奏法が紹介され、初心者でも楽しめる音楽表現として番組が構成され、3人の女子中高校生が最後は演奏を披露する番組として、教育現場からも再放送のリクエストが何度もあった。(2020年3月30日までに4回再放送)

第2例: 毎回ゲストを招いて展開するTBSテレビのトークバラエティ番組 (2021年4月6日放送) では、演出上の方針もあってか奇人変人をいじるような扱い方で「変態」というテロップが流れ、5年刻みでビートボクサーの世代を区切った年表が示されて、ビートボクサーが紹介された。

「すらぶるため」は今回のインタビューの中で「奇人変人」扱いや「びっくり人間」と呼ばれたことに不快感を表している。また、筆者はこの番組の年代別の解説には内容的に明らかに誤解を招く怖れがあると考えている。

ヒューマンビートボックスが使用する音には人間離れた音があることは事実であり、それがこの音楽表現の魅力の一つではある。しかし、人間離れた音への珍しさや興味だけでは、やがて一般聴衆からは飽きられてしまうであろう。

4. ヒューマンビートボックスの今後

人々が様々な音楽表現に接する機会はこれまで、ライブハウスやコンサートホールなどでの生演奏をはじめ、テレビやラジオ放送、CDやDVDといった録音・録画メディア等があった。ただ、YouTubeが普及するまでは、個人が音楽を世の中に広く発信することは多額の費用がかかるため極めて困難であった。しかし、安価な設備投資で音楽や映像を発信できるYouTubeが2005年以降に登場したことにより、これを活用してヒューマンビートボックスの演奏を発信する人たちが世界的に増えた³³⁾。

YouTubeの活用は音楽のジャンルを超えて鑑賞のプラットフォームとして広まり、アマチュアの歌手やクラシッ

ク音楽演奏家オペラのような大規模な総合芸術まで普及している。しかし、ヒューマンビートボックスの分野ではYouTubeへの進出がコロナ禍³⁴⁾によってライブが減少する前からすでに始まっていた³⁵⁾。背景には①身一つでできるためにコストがかからない、②細かな決まり事がないため自由度が高く経験年数が浅くてもアイデア次第で興味をひくコンテンツを作成できる、これらの理由によるためと考えられる³⁶⁾。

また、このような傾向の広がりにはヒューマンビートボックスと“YouTubeとの親和性”の高さにも要因があると筆者は考えている。“YouTubeとの親和性”の高さについて筆者は、次の三つの背景があると考えている。

- ①インターネット環境さえあればいつでもどこでも動画をアップロードできる。
- ②聴取者と演奏者間で言葉や音楽を通したやり取り（二次的著作物も含む）が簡単にできる³⁷⁾。
- ③YouTube（仮想空間）でも奇抜な音や細かさを伝えられることができる。

ヒューマンビートボックス“すらぶるため”はこのようなヒューマンビートボックスと“YouTubeとの親和性”を体現していると筆者は考える。

本稿では、日本におけるヒューマンビートボックスの状況変化について“すらぶるため”を中心に述べてきた。“すらぶるため”は、日本におけるヒューマンビートボックスのを、本場のストリート文化からインターネットという仮想空間の中へ持ち込み多岐多様化させた。同時に彼は新時代の音楽表現について演奏と指導の活動を展開した人物である。筆者は今後ヒューマンビートボックスという音楽表現を学校教育で活用していく方法について研究を進めていきたい。

【付記】本稿は科学研究費基盤研究（C）「学校教育におけるヒューマンビートボックスの指導でのオノマトペの活用法の研究（課題番号：19K02799）2019年度～2021年度」の助成を受けている。

【注】

1) 2005年2月14日に、アメリカ・カリフォルニア州サンブルーノに本社を置くオンライン動画共有プラットフォームである。PayPalの元従業員であるチャド・ハーリー、スティーブ・チェン、ジョード・カリムの3人によって設立されたこのサービスは、2006年11月に16.5億米ドルでGoogleに買収され、子会社化されている。(Wikipedia 検索日 2021年5月1日)

Googleの発表(2016)によれば、日本におけるYouTubeの利用率は77% (n=8,510)とされている。

- 2) CiNii（国立情報学研究所）によれば、2014年度採択の『音楽表現の新たな素材としてのヒューマンビートボックスに関する基礎研究』（科研費基盤C 課題番号26370193）が国内の公的研究費による研究としては日本初である。国外では、歴史的背景や人物に関する研究、MRI（核磁気共鳴画像）による発音構造の研究などが盛んに行われている。Google Scholar 検索（2021年4月末現在）
- 3) 河本洋一『日本におけるヒューマンビートボックスの概念形成～世界的な潮流と日本人ビートボックス“Afra”との関わりから～』音楽表現学 Vol.17, 2019, p.35.
- 4) バーバーショップ復活期（1930年代以降）に確立した、四声が主にホモフォニー的に進行するア・カペラの無伴奏同声合唱の形態の一つ。
- 5) 打楽器の奏でる音色を、そっくりそのまま口で表現する技術。
- 6) 河本洋一『音楽表現の新たな素材としての模倣音の探求～非言語音による直接的模倣音のための発音器官の使い方～』音楽表現学 Vol.7, 2009 に初出する造語であり、様々な楽器の音や環境音等を人間の発話器官を使用して模写した音のことを意味する。
- 7) 2019年3月1日 MarkeZine News Web版 (<https://markezine.jp/article/detail/30504>)
- 8) AFRAがビートボックスを目指そうとするきっかけを与えた1987年結成のヒップホップのバンドである。RahzelやScratchといったヒューマンビートボックスという概念が海外で形成されていった第二世代を代表するバンドである。AFRAは1999年に初めてTHE ROOTSのLPレコードを誕生日プレゼントとして父親からプレゼントされた。
- 9) THE ROOTS.1993. Organix. Remedy Recordings. USA. RRLP001
- 10) 総務省『令和2年情報通信白書』第2部第5章第2節ICTサービスの利用動向 令和2（2020）年8月5日発行 電子書籍版（PDF）とWeb版がある。
- 11) 開催日：2013年11月23・24日 会場：渋谷Club AsiaとClub VUENOS 主催：（社）日本ヒューマンビートボックス協会
- 12) 視聴者の要求に応じて動画を配信する形式で、各人は必要に応じて何度でも繰り返し視聴することができる。
- 13) 2009年に一般社団法人日本ヒューマンビートボックス協会が設立された。この協会によるJapan Beatbox Championship開催を期に、日本においてもヒューマンボックスの知名度は高まり、急速に普及した。
- 14) “面白ビートボックス”とは“すらぶるため”自身による自己紹介時の呼称である。「ビートボックス」はリズム生成機器の名称だが、文章表現上「ヒューマンビートボックス」では長くなる場合は、単に「ビートボックス」と表記し同義に用いる場合がある。
- 15) フジテレビ系列で放映された『力の限りゴゴゴ』という若者向け青春バラエティ番組（2001年5月～2002年9月）のコーナー

- 16) YouTubeのお勧め動画は、ログインした視聴者の視聴履歴をGoogleのAIが解析して、自動的にリスティングするサービスである。
- 17) Kenny Muhammad(本名同じ):1968年12月3日ニューヨーク生まれ。別名“人間オーケストラ”とも呼ばれ、ヒップホップの音楽だけでなく、ジャズ、ロック、レゲエ、サルサ、ハウス、テクノといった様々なジャンルの音楽スタイルとの融和したヒューマンビートボックスの演奏に長けている。息を吸いながら発音するインワード・ボイスと呼ばれる「Kスネア」を最初に一般化した人物である。
- 18) 第2回 Zoomによる聞き取り調査(2021年1月9日)での“すらぶるため”の発言
- 19) 同上
- 20) すらぶるため公式 YouTube チャンネル <https://www.youtube.com/channel/UCdA0onVqp2nq4tuZgLLsKUw>
- 21) 小沼純一 『ミニマル・ミュージック～その展開と思考』 青土社 1997 p.82
- 22) 現在ではテープを使った物理的な方法ではなく、電子的にサンプリングした音を漸次変化させていく方法が主流である。
- 23) 第5回 Zoomによる聞き取り調査(2021年1月15日)での“すらぶるため”の発言。
- 24) 小沼純一 『ミニマル・ミュージック～その展開と思考』 青土社 1997 p.82
- 25) 「嫌だ千欲しい」の動画リンク：
 - ◇ 2012年版 <https://www.youtube.com/watch?v=us8k002v6Fk>
 - ◇ 2015年版 https://www.youtube.com/watch?v=R_1FpiuilSo
 - ◇ 2020年版 <https://www.youtube.com/watch?v=ss0OsWitWpo>
- 26) 第2回 Zoomによる聞き取り調査(2021年1月9日)での“すらぶるため”の発言
- 27) 同上
- 28) 同上
- 29) 同上
- 30) 同上
- 31) 第3回 Zoomによる聞き取り調査(2021年1月10日)でのAFRAの発言
- 32) 『音楽メディアユーザー実態調査』 日本レコード協会 2019年11月 n=3,174
- 33) 2005年以前にも動画投稿サイトはあったが、76言語(2021年5月1日現在)に対応した全世界的な展開のサイトとしてはYouTubeが最も古い歴史をもつ。
- 34) 本稿では、2020年4月7日の初回の緊急事態宣言以降を「コロナ禍」と捉えている。
- 35) 日本人ビートボックスで最初にYouTubeにヒューマンビートボックス動画をアップロードしたのは、2007年9月24日のHIKAKINである。
- 36) 河本洋一『ヒューマンビートボックスの可能性についての一考察～ビートボックスへの聞き取り調査をとワークショップを通して～』札幌国際大学紀要第43号 2012, pp.162-163.
- 37) YouTubeでは原作者へのリスペクトの上で、いわゆる“うたつてみた”と言われる二次的著作物のアップロードも盛んである。無断での二次的著作は違法だが原作者がそれを認めたり黙認したりしている場合も多く、ヒューマンビートボックス以外でも盛んに行われている。